

OMM JAPAN 2022 イベントディレクターレポート

はじめに、OMM JAPAN 2022の開催を楽しみいただき、今年も全国から集まってくれた参加者の皆様に心から御礼を申し上げます。ありがとうございました。
例年以上に山岳的要素と藪などの植生の濃いエリアに加えて2日目には冷たい雨が振り、標高の高い場所では暴風も伴う7年ぶりの”OMM Weather”となった今回のOMM JAPAN でしたが、多くの参加者がこのコンディションを待っていました！と言わんばかりに楽しみ、充実感に満ちた表情でFINISHに帰って来る姿を沢山見させてもらい、日本上陸から9回目を迎えたこのOMM JAPAN の参加者マインドとスキルのレベルが本場イギリスにも負けないほどにまで上がって来たことを実感しました。

来年はいよいよ2014年の日本初上陸から10年10回目の節目となりますが、運営チーム、参加者ともに今日までの10年の集大成となるような素晴らしいイベントとなるようにまた今年の反省と課題を活かし準備に励みたいと思います。

評価・課題・反省

1. 開催地

今年の開催地である岐阜県郡上市高鷲山周辺域を開催エリアとして本格的に検討し始めたのは2020年のイベント終了直後頃、今回コースプランナーを務めてくれた谷川が以前より可能性を見出し個人的に調査をしていたエリアでした。

このエリアは一般的には中部関西圏から最も近いスノーリゾートエリアとして知られ、西には登山コースとしても人気の大日ヶ岳が有名ですが、今回の高鷲山周辺、そしてそのさらに奥地へと繋がる山域はおそらく殆どの参加者にとっては未知のエリアだったと思います。しかし実際に足を踏み入れれば、そこにはナビゲーションとルートチョイスのバリエーションに富んだOMMには理想的な地形が広がり、そしてちょうど紅葉に彩られた美しく壮大な景色に多くの参加者が感動を憶えたのではないのでしょうか？

今回のような一般的な登山やレジャーでは足を踏み入れることのない日本各地の知られざる秘境のような豊かで壮大な自然をOMM JAPANがきっかけで知ってもらえることもまたイベントのひとつの醍醐味となるように、今後も開催地選定にはこだわりと情熱を持って進めていきたいと思えます。

2. イベントセンター

今年のイベントセンターはスキー場施設内だったことで電源の確保や暖の関係などの設備が整っていたので設営やオペレーションは非常にスムーズに進められる事ができました。

また近年、毎回会場設営と前夜祭をオーガナイズするノマディクスチームの経験も積み上がっていることもあり、OMM JAPANらしい会場の空気感や臨場感のイメージをチームで共有しながら

ら会場づくりができています。来年以降もまたどのような場所でもOMM JAPANらしいイベント会場を提供できるようチームでイメージの共有を強めていきたい。

・今年には2日目に悪天候が来ることが事前から予想されていたので、FINISH後のイベントセンターも例年とは異なるオプションを準備していました。例年は2日目のFINISH～表彰式までの時間帯は晴れていることが多く、その場合参加者たちはちょうどお昼の気持ち良い日差しの下、外の芝生や地面に座りながら汗を乾かしながらレースの余韻を楽しんでいる姿を見せてくれるため、前夜祭と当日受付時は屋内だった会場も、DAY2 FINISHは屋外に移していましたが、今回はその時間帯に大雨の予報も出ていたため、会場を屋内にすることを金曜日に決定し、施設内の泥汚れを防止する養生対策等も施し表彰式までに大雨の中戻ってきた参加者達が休めるスペースも確保しました。

会場を屋内にしたことでFINISH直後の例年の盛り上がりの雰囲気を出せるか、当初は心配していましたが、結果としては多くの参加者の皆さんが一定の間滞在しレース後の余韻を楽しんでくれる姿が見れました。今回の結果を良い成功例として、今後も天候に合わせてフレキシブルに会場レイアウトのオプションが取れるようチーム内で準備時点で共有をしていきます。

・毎年前夜祭のみフードの提供を行っているが、今年は前泊で宿泊施設での食事を予約している方たちも多かったこと、また例年前日受付に来られる参加者の割合はほぼ5割前後となっていることもありフード提供の数がなかなか伸びず出店協力していただいた関係業者さんには思うような売上にならず非常に大きな反省点となった。

一方で土曜日の朝は、受付開始からすぐに会場は賑わい、またすでに前日受付を済ませているチームも会場内で最後の確認をしている姿も多く見られた。今回その時に飲食の提供ができていなかったこともまた反省点となった。来年以降は土曜日の朝に、朝食やコーヒーなどの提供も検討してみたい。

3. オーバーナイトキャンプ

・今年も美しい森に囲まれたキャンプ場を全面的に貸し切り、オーバーナイトキャンプサイトを作り込みました。水道や常設トイレなど、すでに設備が整った環境での作り込みだったため大きな問題もなくスムーズに作り込むことができました。

・昨年の反省から一度廃止していたクワイエットエリアを再度導入することにしました。また今回はこのクワイエットエリアをこれまで以上に大きなスペースで確保してみましたが、結果としては多くの利用者でほとんどいっぱいとなりました。

全体としても1日の行動で疲れた身体をゆっくりと静かに癒やしたいチームも、キャンプサイトでの仲間同士の交流を楽しみにしているチームも、お互いに気を使いあいながらも、ある程度大きな問題やストレスも無く過ごせたという声を今回多く聞けたことは嬉しかった。今後もキャンプサイトでの過ごし方においては、1200名それぞれが、それぞれ楽しみにしている過ごし方ができるよう運営においても工夫を凝らしていきたいと考えています。

・昨年トイレが大混雑してしまったという大きな反省があったため、トイレの数を倍数近くに増やしました。仮設トイレのレンタルは費用において非常に大きなインパクトがあることと、11月

半ばの山間地域という低温環境下のため、毎年数台は水やポンプのトラブル等で稼働しないトイレも出てしまうなど毎年適切な数を出すことが非常に難しいが、今年は数を倍にしたことと、当日の気温がそこまで落ちなかったことなどトラブル要素もなく大きな混雑はありませんでした。

今年のトイレの総数をひとつのベンチマークとして来年のイベントもできる限り混雑の少ないように手配できるようにしたい。

4. スタート・フィニッシュ

今年もスタート、フィニッシュのレイアウトは十分にプランニングできていたこともありDA1、DA2の両日ともに良い雰囲気と導線もスムーズに作れたと思います。OMMにおいてスタートとフィニッシュはやはり特別な思いが交錯する場ですのでできる限りこの場所の雰囲気を盛り上げられるように今後も工夫を凝らしていきたいと考えています。

またスタート・フィニッシュは唯一運営チームがレース中の参加者と時間を共にする場でもあるので、より多くの運営スタッフが応援や声援に出れるタイムシフトもこれから各チームでさらに検討できたらと考えています。

2日目に、Bコース上位数チームのFINISH時刻にゴールゲートやフラッグ等の装飾が間に合わないということが起こってしまいました。

原因はゲートやフラッグ等をスタートとフィニッシュで併用しているために、どうしてもDAY 2スタート後にそれらを回収してスタートに回さなくてはいけないというオペレーションの問題でしたが、来年以降この問題を解決するために今一度両日のスタート、フィニッシュ設営のタイムスケジュールを考え直していきたい。

5. マーシャル・スタッフ・ボランティア

まずは、今年もOMM JAPAN運営チームとして参加してくれたマーシャル、スタッフ、ボランティアの皆様には心から感謝したいと思います。今や日本最大規模の山岳アドベンチャーレースとなったこのイベントですが、その無事成功を支える運営チームもまた、この9年で他に誇れる素晴らしい組織として成長していることをあらためて実感できた年となりました。

この数年で明らかにこれから先のOMM JAPAN運営の礎となる経験値の高いスタッフとそのチームがそれぞれのセクションで確立してきましたが、今年はさらに若い世代のボランティアスタッフたちの参加とその活躍が目立ちました。

50年以上の歴史を誇る本国イギリスのTHE OMMに続いて、ここ日本でもまずは来年の10周年を目標に、その先20、30年と続く伝統ある山岳イベントに成長させたいと考えています。そのためには未来のOMM JAPAN運営を担ってくれる若い世代の活躍と経験を今から積み重ねていくことがいよいよ重要となる段階になったと実感しています。

来年以降も各セクションで若い世代の活躍を後押し、さらにその経験が翌年以降にも積み上がっていくような組織の体制や交流の仕組みを模索していきたいと思います。

・ OMMイベント運営において長年の課題となっていた、イベント運営期間中のスタッフの食事のクオリティ向上について今年大きな変革が起こすことができました。

これまでイベント運営中のスタッフミールはどうしても70ー80名にもなるスタッフの朝昼晩の食事となるとその量の問題から仕出し弁当などに頼ることが多くなってしまい、メニューの少なさやそもそものクオリティの問題等でなかなかスタッフに満足してもらえる食事の提供ができていませんでしたが、今年は前夜祭での飲食ブースでもご協力頂いた堀田裕介氏が、OMM運営スタッフのケータリングの協力も引き受けてくれたことで、毎食本当に美味しい食事を楽しむことができました。

食事の満足度はやはり運営スタッフのモチベーションにも大きな変化を生み、運営の質をより上げていくために大げさではなく非常に重要な要素だと今回身を持って実感することができました。一方で反省点としては、3日間3食を提供するケータリングチームがほぼ休憩する間もないくらいに非常にハードなタイムスケジュールとなってしまったことでした。この点についてはチーム内で反省点と課題点を共有して、提供時間やメニューの効率性も検討しながらまた来年に向けて精度を上げていきたいと思えます。

あらためまして、今回ご協力いただきました堀田さんとスタッフの皆様がこの場を借りて心から感謝したいと思います。ありがとうございました。

THANK YOU FOR ALL

OMM JAPAN 2022 OKUMINOをともに作り上げてくれた仲間感謝を贈ります。

Communications Director Jeff Jensen (株式会社ノマディクス)

渉外マネージャー 我部乱 (有限会社エクストレモ)

Event HeadQuarter 野村治子 (株式会社ノマディクス)

Technical Director 小泉成行

Course Planner 谷川友太

安全管理マネージャー 村越真 (NPO 法人 M-nop)、早川秀人

スタッフ・ボランティアとして参加してくれた皆様

岐阜県郡上市高鷲町 関係者の皆様

ALL Competitors OMM JAPAN 2022に参加してくれたすべての皆様

Writing by

OMM JAPAN EventDirector 小峯秀行